人は死んだらどうなるのか

ルカ福音書16:19-31

16:19 ある金持ちがいた。いつも紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。
16:20 ところが、その門前にラザロという全身おできの貧しい人が寝ていて、
16:21 金持ちの食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思っていた。犬もやって来ては、彼のおできをなめていた。
16:22 さて、この貧しい人は死んで、御使いたちによってアブラハムのふところに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。
16:23 その金持ちは、ハデスで苦しみながら目を上げると、アブラハムが、はるかかなたに見えた。しかも、そのふところにラザロが見えた。
16:24 彼は叫んで言った。『父アブラハムさま。私をあわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。』
16:25 アブラハムは言った。『子よ。思い出してみなさい。おまえは生きている間、良い物を受け、ラザロは生きている間、悪い物を受けていました。しかし、今ここで彼は慰められ、おまえは苦しみもだえているのです。
16:26 そればかりでなく、私たちとおまえたちの間には、大きな淵があります。ここからそちらへ渡ろうとしても、渡れないし、そこからこちらへ越えて来ることもできないのです。』
16:27 彼は言った。『父よ。ではお願いです。ラザロを私の父の家に送ってください。
16:28 私には兄弟が五人ありますが、彼らまでこんな苦しみの場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』
16:29 しかしアブラハムは言った。『彼らには、モーセと預言者があります。その言うことを聞くべきです。』
16:30 彼は言った。『いいえ、父アブラハム。もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに行ってやったら、彼らは悔い改めるに違いありません。』
16:31 アブラハムは彼に言った。『もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』」

【祈りながら考えよう】

（１）金持ちとラザロそれぞれに、死後の行き先を決定づけたのは何ですか。
（２）アブラハムの子孫であるこの金持ちは、なぜアブラハムのふところに行けなかったのですか。
（３）十字架に掛けられた犯罪人のひとりは、なぜパラダイスに入ることができましたか。

【解　説】

人は死んだらどうなるのか。臨死体験を含めて、死後のことについて記している書物は沢山ある。どの人の言っていることを信用したらよいのか迷ってしまう。しかし、私たち人間をお造りになった造り主であるイエス・キリストがそのことについて語っておられる。私たちの生も死もつかさどっておられる方の言葉であれば、実に確かである。

（１）ある金持ちとラザロ

ある金持ちがいた。いつも紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。ところが、その門前にラザロという全身おできの貧しい人が寝ていて、金持ちの食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思っていた。犬もやって来ては、彼のおできをなめていた。(19-21節)

主は物質的な物の管理に関する教えを締めくくるに当たって、ふたりの人の人生、および、そのふたりの死後について語られた。この話がたとえ話として語られていないことに注目したい。ある批評家たちは、この話の厳粛な意味を単なるたとえ話として片付けている。

①金持ちはどんな人か

「この《金持ち》がハデスに落とされたのは、彼が金持ちだったからではない」。救いの土台は、主に対する信仰であり、主を信じなければ、罪に定められる。

この金持ちが救いに至る真の信仰を持っていなかったことは、自分の家の《門前》に寝ていた《貧乏人》に全く関心を持っていなかったことから分かる。彼のうちに神の愛が宿っていたなら、自分の家の表で同胞がパンくずを請い求めているのに、自分が、ぜいたくで安楽な暮らしをすることなどできなかったはずである。金銭を愛する心を捨てて、御国を求める人になっていたであろう。

ある人は、この金持ちも自分の家の門前にラザロがいることを許してやっているのだから、憐れみがなかったわけではないと考える。普通なら門前などにいることを許すはずがなく、裏口へ行けと言うはずだと言う。

しかし、彼はぜいたく三昧の毎日を送っているのに、ラザロに対してはほとんど目もくれない。信仰から出た憐れみの心がない。「信仰がない」ということが、このことから明らかである。彼は神を愛してはいなかった。また、同胞を気づかう気持ちもなかった。生涯良い物を受け続けていたにもかかわらず、それを神と人のために用いなかった。

②ラザロはどんな人か

《ラザロ》は、あわれな「物もらい」で、この金持ちの家の前で毎日おこぼれをもらい、また全身おできができていて、人が忌み嫌うような姿をしていた。野良犬がやって来て、自分の《おでき》をなめることに悩まされていた。

《ラザロ》という名前は、ヘブル語で言えばエルアザルで、そのギリシャ化した名前である。エレアザルとは、「神は助ける」という意味。彼は、「神の助けなしでは生きられない者」を意味する名前を持っていた。ユダヤ人にとって名前はその人自身を表すから、神の助けなしでは生きられないという生き方をしていたと思われる。《ラザロ》が救われたのは、彼が貧しかったからではない。彼は心の内で主の救いを信じていたのである。

（２）ふたりの死後の行き先

①ラザロの行き先

さて、この貧しい人は死んで、御使いたちによってアブラハムのふところに連れて行かれた。(22節)

《この貧しい人は死んで、御使いたちによってアブラハムのふところに連れて行かれた》。《御使いたち》が信者のたましいを連れて行く。御使いたちは、この世において信者たちに仕えるだけでなく、死の時にもそうする。

《アブラハムのふところ》は、至福の場所を示す「象徴的な表現」である。それはパラダイスとも呼ばれる。アブラハムとの交わりを楽しむというのは、どのユダヤ人にとっても、この上もない幸せなことであった。

②金持ちの行き先

金持ちも死んで葬られた。その金持ちは、ハデスで苦しみながら目を上げると、アブラハムが、はるかかなたに見えた。しかも、そのふところにラザロが見えた。彼は叫んで言った。『父アブラハムさま。私をあわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。』(22-24節)

《金持ちも死んで》、そのからだは、《葬られた》。盛大な葬儀が行われたかもしれない。その金持ちのたましいは、意識を持ったままの状態で《ハデス》に行った。

《ハデス》は旧約聖書に出てくる「シェオル（よみ）」に当たるギリシャ語で、ここでは、金持ちが苦しんでいることから、救われていない者の居場所として語られている。

③ヨハネの時から新しい秩序が始まった

イエスが「この金持ちのユダヤ人は《ハデス》に行った」と言われた時、弟子たちは衝撃を受けたに違いない。富は神の恵みと祝福のしるしであると、彼らは旧約聖書から教えられていたからである。

主に従順なイスラエル人には、物質的な繁栄が約束されていた。それなら、裕福なユダヤ人がハデスに行くことなどあり得るだろうか。

主イエスは、物事の（新しい秩序）がヨハネの宣教によって始まったということを告げられた。その時から、富は祝福のしるしではない。その人が管理人として忠実かどうかを試すものとなった。多く与えられた者は、多くのことが求められる。

④死後も意識を持ち続ける

23節は、「死者のたましいは、からだが復活するまでは意識のない状態にある」という「魂の眠り」という考えが誤っていることを示している（エホバの証人の解釈）。死後も意識を持ち続けるということが語られている。

⑤ハデスからアブラハムのふところが見える

さらに驚くべきことに、《金持ち》には《アブラハムが、はるかかなたに見えた。しかも、そのふところにラザロが見えた》。アブラハムとことばを交わすことさえできた。彼は「《父アブラハムさま》」と叫び、あわれみを請い求めた。「指先を《水に浸してラザロ》に持って来させ、自分の《舌》を冷やしてほしい」と頼んだ。もちろん、肉体を離れたたましいが、のどの渇きや《炎》による苦しみをどうして経験することができるのか、という疑問もあるが、

ことばが比喩的に用いられている。しかし、彼が味わった苦しみは現実のものであった。

（３）アブラハムの答え

アブラハムは言った。『子よ。思い出してみなさい。おまえは生きている間、良い物を受け、ラザロは生きている間、悪い物を受けていました。しかし、今ここで彼は慰められ、おまえは苦しみもだえているのです。（25節）

《アブラハム》は彼を「《子》」と呼び、彼が肉による子孫であったことを示している（彼が霊的な子孫でなかったことは明らかである）。肉のつながりは救いに対する何の保証にもならない。

この族長（アブラハム）は、彼がぜいたくで気楽で勝手気ままな人生を送ったことを思い起こさせた。また、《ラザロ》の貧しさと苦しみのことにも触れた。死んだ後で、ふたりの間の立場は全く逆になってしまった。

そればかりでなく、私たちとおまえたちの間には、大きな淵があります。ここからそちらへ渡ろうとしても、渡れないし、そこからこちらへ越えて来ることもできないのです。』（26節）

ここから教えられることは、この世にある間に救いを確立しておかないと、やがて時が満ちて手遅れになるという警告がなされている。救われた者の所からハデスに落とされた者の所へ行く道はなく、その逆もまた同様である。

（４）親族への警告

①旧約聖書（モーセと預言者）の教え

彼は言った。『父よ。ではお願いです。ラザロを私の父の家に送ってください。私には兄弟が五人ありますが、彼らまでこんな苦しみの場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』しかしアブラハムは言った。『彼らには、モーセと預言者があります。その言うことを聞くべきです。』彼は言った。『いいえ、父アブラハム。もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに行ってやったら、彼らは悔い改めるに違いありません。』アブラハムは彼に言った。『もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』」（27-31節）

死んだこの金持ちは突然、伝道熱心になった。《5人》いる自分の《兄弟》たちのところにだれかが行って、この《苦しみの場所》に来ることのないよう警告してほしいと思った。

この5人の兄弟たちはユダヤ人で、旧約聖書（モーセと預言者）を知っているのだから、それで警告は十分なはずだ、というのがアブラハムの答えだった。

金持ちは《アブラハム》のことばに逆らい、「《もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに》行けば、《悔い改める》に違いない」と言った。

しかし、アブラハムは最後に、「神のことばに耳を傾けないのなら、もうそれでおしまいだ」と断言した。もし聖書（モーセと預言者）が言うことに耳を貸そうとしないなら、《たといだれかが死人の中から生き返っても》信じようとしないだろう。このことは、主イエスご自身がよみがえられた時に確かに証明された。主は死者の中からよみがえられたが、それでも人々は信じようとしなかった。

②新約聖書の教え

新約聖書の教えによると、信者が死ぬとそのからだは墓に納められるが、たましいは天に行き、キリストとともにいることになる（Ⅱコリント5:8、ピリピ1:23）。未信者が死ぬと、そのからだは同様に墓に納められるが、たましいはハデスに行く。その人にとって、ハデスは苦しみと後悔の場所となる。

携挙の時、信者は朽ちることのない栄光のからだを与えられ、再び霊とたましいに結びつく（Ⅰコリント15:52-53）。

「終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。」そして永遠にキリストと共に住むことになる。

一方、大きな白い御座のさばきで、未信者のからだと霊とたましいは1つにされる（黙示録20:12-15）。そして、彼らは火の池（ゲヘナ）という永遠の刑罰の場に投げ込まれる。

「また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行いに応じてさばかれた。海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのおの自分の行いに応じてさばかれた。それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。」

パリサイ人をはじめ、金銭に執着して生きる者たちに対する最も厳粛な警告で、ルカ福音書16章は終わる。

（５）悔い改めた犯罪人のひとり

十字架にかけられていた犯罪人のひとりはイエスに悪口を言い、「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え」と言った。ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。「おまえは神をも恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」

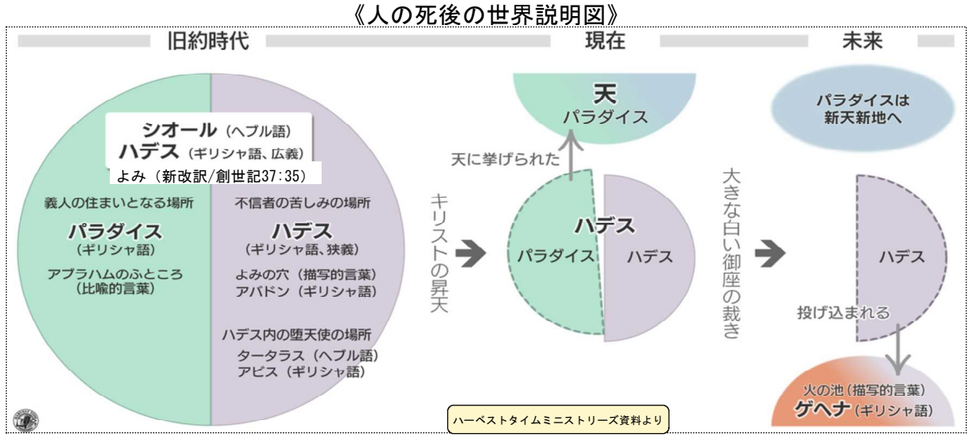
そして言った。「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください。」イエスは、彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」（ルカ23:39-43）

主イエスが十字架に掛けられた時、一緒に十字架に掛けられた二人の犯罪人のうちの一人が、自分の罪を認め、主に信仰の告白をした時、直ちに天の御国（パラダイス）への約束を受けた。彼はまだバプテスマを受けてはいなかったが。バプテスマによってキリスト者になり、天の御国へ行けるのでないことを、この出来事はよく教えている。

それなら、バプテスマは受けても受けなくとも、どうでもよいのか。そんなことはない。主イエスを信じる時、キリスト者になるのであり、その人はいつ死んでも天の御国へ行くことができる。

その人がバプテスマを受けると、地上の教会の一員になる。十字架上の犯罪人は、バプテスマを受ける時間がなかった。だから、地上の教会の一員となることはできなかったが、確かにキリスト者になり、天の御国へ入ることができた。

《人の死後の世界説明図》



（６）煉獄の教え

煉獄は、中世において，ローマ・カトリック教会が発展させた教理で、宗教改革者たちはこれに強く反対した。この教理によれば，中間状態はさばきから祝福へ移る場所、すなわち、罪のために魂が苦しみを受けるが、その罪が償われるならきよめられる場所となる。これは全く聖書的根拠がなく，聖公会の高教会派を除いて、全プロテスタント教会が非聖書的教理として退けている。

「煉獄」という言葉は、聖書のどこにもない。これは、中世のローマ・カトリック教会の教理問答書の中で、煉獄について言及している時、聖書からの裏づけを得ることができず、そのため旧約外典からその裏づけを引用している。

ところが、ローマ・カトリック教会は旧約聖書の正典である39巻以外に12巻の外典を旧約聖書として認めている。そして、煉獄を裏付ける参照箇所として、「カトリック要理」147において、旧約外典のマカバイ記Ⅱ・12章43節を挙げている。

これを新共同訳聖書で読むと、「次いで、各人から金を集め、その額、銀二千ドラクメを贖罪の献げ物のためにエルサレムへ送った。それは死者の復活に思いを巡らす彼の、実に立派で高尚な行いであった」とあるだけで、煉獄という言葉もなければ、そういうことをにおわせる思想すらない。

〈カトリック要理147／中央出版社／昭和41年4月発行〉

*煉獄とはどういうところですか。

煉獄とは、この世で果たし終えなかった罪の償いを果たし終えるまで、義人の霊魂が苦しみを受けるところです。（マカバイ記Ⅱ・12章43節参照）

死後に罪の償いを果たす「煉獄」という考え方は、人間が作ったもので、聖書の教えとは全く関係がない。死者のために、この世の者がどんなに善行を積んでも、あるいはどんなに「供養」をしても、全く効果がない。人情としてはよく分かるが、単なる気休めにすぎない。聖書の福音によれば、罪の償いは十字架のキリストにおいてなされたことであり、死後に罪の償いで救われるなどという思想は全くない。

人間の死後の世界は、信者には、キリストと共なる生活（天の御国）があり、不信者にはハデスがあるだけであって、それ以外の中間地帯などはない。聖書の福音に反する異端の教えに騙されてはなりません。